埴輪 挂甲の武人　３. 授業用の情報（先生用）

1. 文化財・東京国立博物館について

東京国立博物館（トーハク）は日本で一番古い博物館です。「博物館」というのは、世界中のいろいろなモノを展示しているところで、たとえば、恐竜の博物館やおもちゃの博物館などいろいろな博物館があります。トーハクは、昔の人がつくったモノ「文化財」を展示している博物館です。

トーハクで展示している「文化財」とは日本や、世界中の国々の歴史や美術に関わるもので、たとえば、はにわ、絵、やきもの、彫刻、仏像、刀やよろいかぶとなどがあります。今日皆さんに見てもらうのは、トーハクにあるとても有名な埴輪です。この埴輪は土の中から掘り出されたもので、トーハクでは「考古展示室」というところに展示しています（注１）。皆さん、考古学ってきいたことがありますか。「考古学」とは「古」い時代の人びとがくらしたあとや、掘り出されたモノから、そのころの生活や社会・文化について「考」え、それを今の社会に生かすために「学」ぶことです。

（注１）東京国立博物館では定期的に展示替えを行っています。展示予定は東京国立博物館WEB サイト（https://www.tnm.jp/）をご確認ください

2. 時代背景など

この作品が作られた時代は「古墳時代」です。古墳時代になるまでに、日本各地に小さなくに（国）がたくさんありました。そのくに（国）では生活や暮らしが、技術などの発展によって少しずつ豊かになりいろいろ変化していきました。その暮らしの変化の中で、身分の違いも生まれ、権力を持つ人（支配者）とそうではない人に分かれていきます。縄文時代や弥生時代と社会のしくみが変わり、大きく違うところのひとつです。また、死んだ後の埋葬の方法も変化し、権力を持つ人のお墓はとても大きなものになっていきます。この支配者のお墓の形が「古墳（土を高くもって作ったお墓）」という形で作られた時代を古墳時代と呼びます。

この古墳の上やまわりに置かれた土のやきものが「埴輪」です。埴輪はいろいろな形があり、身分の高い人ほど古墳も大きく、たくさんの埴輪が置かれていたと考えられています。埴輪は、自分たちの暮らしの中で使ったり祈りをささげるために作られたものではなく、権力を持つ人が作らせたものと考えられています。死んだ後も権力を示すものの一つであったかもしれません。

3. 作り方

土（粘土）をひも状に細長くし、輪積みと呼ばれる製法で縦に積み上げていきます。積み

上げた土は、丁寧にくっつけて表面を木の板で整えていきます。よく見ると、表面にスジが確認できると思います。これを繰り返して、埴輪の形が作られていきます（中は空洞です）。脚や胴体などのパーツごとに作り、それらをくっつけて全身を形づくってから焼いて完成させました。これだけの大きなものをつくるために、いっぺんに柔らかい粘土を積み上げると下のほうから歪んでしまうため、作るときは下のほうが乾いてから、その上に柔らかい粘土のひもをつけ足していき、この方法を何度も繰り返して、顔や冑（かぶと）まで形を作っていったと考えられています。

4. かたちやデザイン

この埴輪の人物は、挂甲と呼ばれる甲冑（かっちゅう）を全身にまとい、右手には大きな刀、左には弓をもった勇ましい姿をしています。挂甲とは古代の日本で使われていたよろいの形式のひとつです。そのデザインのよろいを着用していることから「挂甲の武人」と呼ばれています。群馬県太田市で見つかったもので、６世紀の東国（あづまのくに：今の関東あたり）の武人のいでたちを知ることができる貴重な資料とされています

頭にかぶっている冑（かぶと）には、顔を守る頬当てと後頭部を守る錣（しころ）が付いています。この冑の形は日本列島独自の形です。冑の頭にかぶっている部分（鉢：はち）には粘土の小さな粒が貼り付けられています。これは、実際に当時、使われていた冑が、鉄の板を組み合わせ鋲（びょう）でとめて作られていることを忠実に表現したものと考えられます。甲（よろい）も小さな鉄板を綴（と）じあわせて作られていたようです。腰を守るスカートのような草褶（くさずり）もついており、肩や膝を守るパーツ、手を守る籠手（こて）や、臑当（すねあて）、沓甲（くつかぶと）など、細かい部分やよろいの構造までしっかり表現されています。蝶結びにした紐がついているので、紐を結んで装着したと考えられます。武器を見ると、腰には太く長い大刀（たち）を提げ、左手に弓を持っています。左手首に巻かれているのは弓を引くときに手首を守る鞆（とも）と呼ばれるもの、背中には靫（ゆき）と呼ばれる鏃（やじり）を上に向けた５本の矢を背負っています。

5. 埴輪の道具としての役割

埴輪は古墳（お墓）の中に入れるものではなく、古墳の上やまわりに置かれた土のやきものです。埴輪は丸い筒型の形や、動物や家の形をしたものなど、様々な形のものがあります。埴輪は死者の魂（たましい）を守ったりしずめたりするものと考えられています。古墳や埴輪からは、当時の生活や暮らし、社会のしくみなどを知ることが出来ます。

6. その他、作品情報

この埴輪が出土した群馬県東部の太田市周辺では、同じような特色をもつ武人埴輪が数体出土しています。これらに共通する高い技術とすぐれた表現力から、この地域には埴輪作りを専門とするプロ集団がいたのではないかと考えられています。